

企業広報誌と戦争

——『學鑑』掲載論文・論説に見る明治から昭和前期——

三 島 万 里*

A Study on the Relation between a Public Relations Magazine and the War

Mari Mishima

要 旨 本稿は企業広報誌が①誰を対象に、②どのようなメッセージを発信したか、③それはどのように変化していったか、の三点を社会経済環境との関連の中で分析しようとするもの的一部分である。具体的には日本の企業広報誌の嚆矢であり、かつ今日まで刊行され続けている丸善『學鑑』の論文・記事の中から、時代の変化に伴い変わった部分、変わらなかった部分を分類し、企業広報誌の役割機能（何に貢献したか）の考察を目的とした。

1 問題の所在

企業広報誌とは、企業広報活動¹⁾の一種であり、①企業もしくは企業グループがその理念、及び活動内容を「地域住民，社会に広く伝えるために」発行する媒体であり、②定期的に発行され、ある程度のページ数を要し、③さまざまな種類のテーマを提供するもの、とする（社内報，パンフレット，新聞との差別化）。

商業雑誌と異なる点としては、①ターゲットがオピニオンリーダー，消費者，地域住民などのステークホルダーズに限定されること²⁾，の二点が，また製品カタログ，IR・サステナビリティ・CSRなどの各レポートと異なる点は、③情報開示が目的ではないこと（双方向性の確保），④編集方針に企業の独自性が打ち出されること（行政・業界団体による「規格化」とは対極をなす），の二点がそれぞれ上げられよう。

経済広報センター〔1997〕によれば、日本で最初の広報誌は1882年に刊行された大日本水産会『水産界』³⁾とされている。しかし大日本水産会は水産業界の業界団体であることから正確な意味で企業広報誌とは言い難い。その結果、日本における企業広報誌の嚆矢は1887年創刊の『學鑑』（丸善），ついで1889年創刊の『嗜好』（明治屋）に求められよう。

日本において企業広報誌の機能はどのようにして作り上げられてきたのか、それはどのように変化していったのか。本稿は日本における最初の企業広報誌である『學鑑』に焦点を当て、創刊から1954年（経済白書が「もはや戦後ではない」と断じる直前の時期）までの掲載記事・論文の対象

* 本学教授 日本産業論

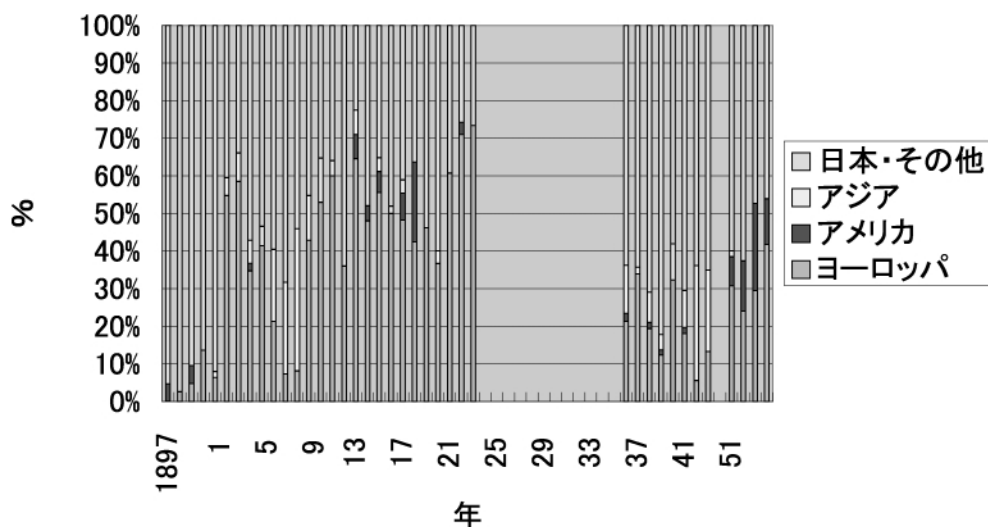
地域別分析と内容検討をもとに、企業広報誌としての性格・機能（社会に何をコミュニケーションしようとしたのか）、およびその変化を、①日露，第一次，第二次世界大戦と三度の戦争をはさんだ経済社会環境との関わり合い，②編集者の役割，の二点から考察しようとするものである。

2 『學鑑』の概要

丸善は1869年、早矢仕有りが横浜に創立した書籍文具・洋品雑貨販売業、丸屋商社が前身⁴⁾であり、翌70年には日本橋の現在地に開店している。80年には定款を改め、責任有限・丸善商社に改組、洋書⁵⁾・文具を中心とした貿易振興に尽力する一方で、出版事業にも進出⁶⁾、83年にはチェンバースの *Information for the People* の翻訳『百科全書』を刊行する⁷⁾など、活発な西洋文化の啓蒙・普及活動を展開していた。

顧客への媒体を使ったマーケティング活動は、設立当初は新聞⁸⁾で、さらに80年代後半から販売目録⁹⁾、定価表¹⁰⁾などを通して行われてきた。しかし、①教育の普及により、洋書を読むという知識階層が増加してきたこと¹¹⁾、②日清戦争の影響で中国関係の書籍の増加、および雑誌創刊が多発したことによりヨーロッパ文学への憧れが拡大したこと、の二点を背景として、単なる新刊紹介ではなく、接触を密にすることによりきめ細かい啓蒙活動を行い、顧客と丸善との間に「友好的交情」を結ぶ¹²⁾（顧客の組織化）ことを可能とするような媒体が必要となっていた。事実当時の洋書の需要は常時微々たるもので、洋書店のいくつかは経営困難に陥っていたという¹³⁾。友好的交情を結ぶ＝読書雑誌を作り上げる過程は決して平坦なものではなかった。図-1は、『學鑑』¹⁴⁾の創刊号から関東大震災、第二次世界大戦による二度の休刊を挟み、1954年までの掲載論文・論説を年別・関係地域別に分類したものである。論文数、および取り扱い地域から、おおむね以下の5つの時期に大別できる。

図-1 学鑑の記事分類



第1期（1897～1901年）：ほとんどの論文・論説が日本国内のもので埋められていた。第2期（1902～1923年）：前半はアジア関係記事・論文が増加傾向にあり、1910年以降、ヨーロッパ関連が復活してきている。第3期（1924～1935年）：広告中心となり、署名論文がほとんどなくなる。第4期（1936～1943年）：40周年記念号とともに以前のスタイルに戻る一方で、アジア関係の論文・論説が再び増加してきている。第5期（1951年以降）：アメリカ関係の論文・論説の増加が特筆される。

以下では各時期の経済社会環境と掲載論文・論説の分析を通して、丸善が社会に対して発信したものを検出、その変化の軌跡を明らかにする。

3 「ご婦人の三越・殿方の丸善」¹⁵⁾～第1期から第2期へ

3-1 雑誌族生の時代

1887年（明治20年）から世紀末にかけ、日本経済は右肩上がりの成長過程に入っていた。1886年以降、会社企業勃興数は、鉄道・紡績会社を中心に増加の一途をたどり（1886年の2392社、資本金総額1億円から1892年には5644社、2億9000万円に増大¹⁶⁾、さらに1895年（明治28年）の日清戦争の勝利は、日本経済社会に以下の5つの刺激をもたらした¹⁷⁾。①戦費に基づく消費の増加と富の資本への集中、②償金3億6000万円の流入、③戦勝による「信用」の増加と外資輸入通路の疎通、④戦勝による帝国主義的進出と販路の拡張、⑤戦勝の広告的効果と海外における邦商需要の増大、である。

英語教科書の輸入を事業の中心としていた丸善に、日清戦争は三つの変化¹⁸⁾をもたらした。

第一は、実業分野における「支那」に関する書籍の需要が急増したことである。

第二は、教科書類の売りさばきが伸張したことである。「大勝した二大原因が憲政の施行と普通教育の普及にある」とされたことから、「日清戦争の償金2億テールの一部は国民教育の振興に使われ、国民の知的水準の向上に寄与した」¹⁹⁾結果であるという。

そして第三は、雑誌の隆盛とそこに掲載された翻訳、翻案小説の増加が、洋書への知的関心を呼び起こしたことである。普通教育が普及するとともに新聞²⁰⁾・雑誌²¹⁾の読者層は拡大していった。『国民之友』（1887年創刊、以下同様）、『太陽』（1895）、『新小説』（1896）など明治20～30年代にかけて創刊された雑誌は、それ以前のものと比較し、「中の記事はもちろんのこと、写真絵画の挿入、印刷製本その他の諸体裁、西洋雑誌を模倣し、加味し、参考し、暗示としたこと、…一目瞭然」²²⁾であった。

表-1は『国民之友』創刊の1887年から、『學鏡』創刊の1897年にいたる11年間に発表された翻訳文学中、雑誌に掲載されたものの一覧であり、以下の事実が読み取れる。第一は、年別翻訳件数の推移を見ると、1889年から急増しており、日清戦争中の94、95年は半減するものの、96年以降再び増加に転じていることである。教育の普及とともに、西洋文化受容への国民的希求は、戦争をはさんで、さらに強くなってきていることが伺える。第二は、掲載本数を見ると、『女學雑誌』（64本）を筆頭に、『国民之友』（52本）、『家庭雑誌』（23本）、『文藝俱樂部』（22本）、『少年園』『しがらみ草紙』（それぞれ21本）の順となっており、一般向け文芸雑誌、女性向け雑誌、子供向け雑誌

表-1 雑誌に記載された翻訳文学

〈雑誌別〉

	女学 雑誌	同志社 文学	国民 之友	少年園	しがらみ 草紙	小国民	幼年 雑誌	家庭 雑誌	裏錦	文藝 倶楽部	太陽	その他	合計	
1887	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	15	
88	11	4	3	1	0	0	0	0	0	0	0	10	29	
89	8	2	11	4	4	1	0	0	0	0	0	24	54	
90	10	1	7	1	5	1	0	0	0	0	0	15	40	
91	6	2	4	9	3	0	10	0	0	0	0	18	52	
92	9	1	6	2	5	3	1	0	0	0	0	21	48	
93	8	3	4	3	2	2	3	13	5	0	0	13	56	
94	3	1	3	1	2	0	0	2	1	0	0	10	23	
95	1	1	2	0	0	0	0	2	3	2	4	14	29	
96	0	0	6	0	0	6	0	1	3	7	10	35	68	
97	2	0	6	0	0	1	0	5	7	13	6	44	84	
合計	本数	64	16	52	21	21	14	14	23	19	22	20	212	498
	構成比(%)	12.9	3.2	10.4	4.2	4.2	2.8	2.8	4.6	3.8	4.4	4.0	42.6	100.0

〈地域別〉

	本数	構成比(%)
イギリス	140	28.1
アメリカ	67	13.5
フランス	82	16.5
ドイツ	86	17.3
ロシア	55	11.0
その他	68	13.7
合計	498	100.0

(出所) 川戸ほか(編)『明治期翻訳文学総合年表』より作成。

という三つの読者層が存在し、文学を通して西洋文化が受容されていったことである。第三は、地域別に見た場合、圧倒的にイギリスが多く(全体の28%)、以下ドイツ、フランス、アメリカ、ロシアの順となっていること、特にロシアは1893年以降急増していること、である。日本の西欧文化への希求心は、まずイギリスから始まっていった。

これらの翻訳原本を輸入して翻訳者の間に広め、さらに「中学生や高校生が増大する時代、民衆一般の知的向上の意欲が高まる時代」²³⁾の欲求に答えて、洋書を、時には廉価版のものを輸入し、読書人たちの間に流布させたのは、「輸入外国書籍の約90%を取り扱っていた」²⁴⁾丸善であったことは想像に難くない。『社史』で書店部の売り上げ実績を見ると、1894、95年にはそれぞれ8万5-600円程度であったのが、96年には15万8000余円、『學鑑』が創刊される97年には16万7400余円に及んだ、となっている²⁵⁾。読者層とのつながりを一層密にし、販路をさらに拡大するための新たな手段を講じることで、急拡大する翻訳雑誌のリーダーシップをとり、その読者層を捕まえようと

する意識が芽生え、その資金も十分であったと考えられる。

3-2 編集人・内田魯庵の業績

創刊号の冒頭「発刊の辞」は「三光天に輝くも、必ず陰影あり…一燈を加ふるもの自ずから一燈の用を為す」²⁶⁾とし、学の道を照らす燈火としての役割を自らに与えている。発行兼編集人は多門直次郎とあるが、これはいわゆる署名人であり、実際は後藤狂夫（字は頭鐵、警官養成所に勤務の傍ら漢字の素養あるいは筆の立つ人として雑誌刊行に参画）が主幹兼主筆として活動²⁷⁾していたという。菊判で本文は約30頁、定価前金5銭、広告料1頁3円（2号から5円に値上げ）となっており、発刊所想論説二本の後には、「我が国教育の精神」「国字私考」など、どちらかという漢文趣味が強い論文、詩歌（詩歌、俳句数十首）、および赤紙20頁の「丸善工業書目録」が続き、洋書広告は2頁のみ、さらに菱屋洋物塵（丸善の洋品部）、熱海・富士屋、日光・小西などの旅館広告などが並んでおり、在日外国人もターゲットとしていたことが伺える。

本格的な洋書新著目録は第3号からである。「稟告」として「弊社是まで英文書籍時価月報を発行いたし候ところ、今後は弊社発行雑誌の燈紙上へ掲載広告候ことに相定め…」たことを告げ、23頁の洋書目録を付録としてつけている。しかし内容および体裁はその後も創刊号と大差なく、読書雑誌としては不十分であり、販促用メディアとしてもカタログの域を出ないものであった²⁸⁾。編集者の側に、どのような読書雑誌が社会で必要とされているか、ということが理解できていなかったといつてよい。

56号（1902年1月）より『學の燈』は一新される。表紙はこれまでの各大学の校舎写真（白黒）から智恵の灯火を捧げる女神像（色刷り）に変わり、裏表紙も左開き用の表紙として使われ、英語印刷となっている²⁹⁾。誌名が『學燈』となり、坪井正五郎「洋書談」、坪内雄三「読書雑感」、さらに「19世紀における欧米の大著述についての諸家の答案」と題したアンケート調査結果（学識経験者73名、のちに遅れた5人と合わせ合計78名）³⁰⁾を発表している。それによれば、第一位はダーウィンの『種の起源』（32票）、以下ゲーテ『ファウスト』（16票）、スペンサー『総合哲学大系』（15票）、ショーペンハウエル『意志及び表象としての世界』（14票）、コント『実証哲学講義』（13票）、大英百科全書（11票）、であった。

変化の原因は編集者の交代にあった。『国民新聞』『国民の友』等に参加し、すでに作家、批評家として名を成していた内田魯庵³¹⁾が前年の1901年に入社³²⁾、この年より編集者となったことは『學燈』に以下の四つの改革をもたらした。第一は、体裁・執筆者を一新することで読書雑誌としての學燈の地位を確立したことである。第二は、自らも魯庵生、學燈子などのペンネームで英文学画史、トルストイの翻訳などに健筆をふるったことである。第三は、「善六」のペンネームで「陳列場より」という新着書内容紹介コラムを担当、欧米の名著の教示に預かれば、いつでも掲載すると読者への誌面の開放を約束し、それを実行したことである。第四は、洋書広告文案にまで手を伸ばす³³⁾など、販促用メディアとしての役割も十分に果たさしめたことである。

読者層からの好評に力を得た魯庵は、半年後の61号（1902年6月）で、「社告」として以下の三点を宣言している。①「本年以後全く編集の組織を一変し専らビブリアグラフィーを主とし及ばずながら読書界に貢献」する計画であること、②事務整理上献本を一端整理するため、継続希望者は

葉書で申し込んで欲しいこと、③定価は1冊5銭から10銭へ、広告料は1頁5円から15円へ（半頁以下は謝絶）それぞれ値上げすること、である。

そしてその宣言通り、翌年5月には和文195頁、洋文37頁、挿絵4葉入りの臨時増刊号を出版した。定価は35銭³⁴⁾、内容と執筆者は以下の通りであり、読書雑誌としてもビブリオグラフィとしても立派に通ずるものになったといえよう。

○古代文字の復活	坪井正五郎	1頁
○沙翁書誌	上田敏	34
○机辺閑話	幸田露伴	107
○支那文字の起源及びその構成法	久保得二	132
○コロの作画	魯庵生	160
○陳列場—（まず如何なる書を備ふべきや）	善六	175~195
○英訳大陸文学の榮 ³⁵⁾	學燈子	13~37
○Zusammenstellung wichtigster Erscheinungen im Gebiete der modernen Novelistik und Dramatik	森林太郎	1

3-3 魯庵と戦争

この時代のもう一つの特徴は、日露戦争開戦（1904）から韓国併合（1910）に至るまでの期間における（ロシアを含む）アジア関連記事・論文の増加である。1904年5号には「満州研究書目」、7号には台湾書目が掲載され、翌05年5号には「台湾文庫」（伊能嘉矩、以降1911年2号まで21回連載）が開始され、08年3号には朝鮮史研究の特集が組まれるなど、東アジア関係の記事・論文数が増加してきており、日露戦争の勝利に関する世間の熱狂ぶりが伺える。

編集者としての魯庵の戦争に対する意識はどのようなものであったのか。結論を先取りすれば、魯庵は常に文化的使命を優先し、戦争行為に関しては懐疑的であったといつてよい。『學燈』に現れたその証左として以下の2点を指摘しておきたい。

第一は、1904年10号の「戦勝の記念としての図書館（亜細亜図書館の建設）」（魯庵生³⁶⁾）である。「由来大図書館の起源を尋ねれば大理想ある豪傑の天子の保護」によらざるものはなく、日本開闢以来の戦勝の終わりを全うすべきものは大図書館の新設であり、戦勝の記念としての亜細亜図書館の建設は「百の銅像、千の記念碑よりは張るかに勝りて我が文明を世界に発揚するに足る」として、その建設を提議していることである。国家主義高揚の中で、書物文化の視点から、アジア的規模で学問、知の問題を考えようとしていた魯庵の姿勢を伺うことが出来よう³⁷⁾。

第二は、05年3号の「夢に老翁と語る」（魯庵生³⁸⁾）であり、その概略は以下の通りである。病に伏していた魯庵は奉天陥落の歓声を聞き、外にでてみると、東京は熱狂の渦の中にあった。その時背後に銀髭便服の老人が現れ、日本国民は伶俐であり、その前途は祝福すべきであるが、ややもすれば矜驕にして外国人を夷狄のようにみなし、その幼稚な技芸を誇負する癖があるとし、今回の戦勝によってその癖はさらに長じ、牽強付会な日本中心論を唱えるものすらあることの愚をとき起こす。曰く「戦勝に驕る勿れ、愛国に狂す勿れ。須らく虚心坦懐、熟考して而して御身の國が未だ一カントをも一沙翁をも一ニュートンをも一ダーウィンを一ヴィンチをも一ドナテロをも一ルッ

ソウをも一ゲータをも生ぜざる事を記せよ」。「平和主義者」³⁹⁾魯庵の言は明快である。

4 広告主義の氾濫と競合相手の活発化～第2期から第3期へ

1923年の関東大震災による9ヶ月の休刊以降、『學鐙』に現れた変化は以下の三点にまとめられよう。第一は、頁数そのものは震災以前と変わらないが、その大半が広告に使われていること、時には全頁広告という号もあったこと（総目次からは29巻7, 9, 10号, 33巻8号がそれに該当, その他も記事とは名ばかりのほとんど広告のみの号が多い）である。第二は、28～29巻は全く署名論文がないこと, および短い記事の大半が洋品, 文房具, 流行に関するもの, もしくは海外笑話・小話, 文芸ゴシップなど軽いものでしめられていることである。第三は、30～39巻はようやく署名論文⁴⁰⁾が出てくるものの, 同一人物によるシリーズが大半であること, ペンネームが多いこと, 内容的には軽い読み物, もしくは書籍装飾関連が多いこと, などの特徴が指摘されることである。

それまでの『學鐙』が、読書雑誌としての地位を確立し、一方では名著・新刊の紹介, 他方で若い読書人の登竜門としての役割を果たしてきたことから比べると、まさに隔世の感が生じたといっ
てよい⁴¹⁾。この原因は、第一に編集人の交代, 第二に社会経済環境の変化による丸善の経営方針の変更, の二点に求められる。

第一の点に関し、魯庵が『學鐙』の編集人を辞した時期は明らかではない。1923年の関東大震災当時はまだ編集人であったこと, 脳溢血で倒れたのが1929年（同年6月死亡）であったこと, などから震災での休刊以降としか類推できない。『百年史』は魯庵が「昭和に入っていくべくもなく, 体の調子をこわして欠勤勝ちとなったため, 堅田悠久を中心とする広告課が合議で彼の仕事を踏襲していった」⁴²⁾とし, 魯庵の死後も「しばらくは専任の編集者を置かず」1930年6月に水木京太（筆名東司郎）が登場するまで, 編集・印刷・出版の仕事を合議制で行ったとしている。

第二の点に関しては、以下の2点を指摘しておきたい。

ひとつは、大正末期から昭和初期にかけて成立した「文化産業」としての丸善の存在である。日清戦争以降1920年春まで日本経済は「世界に比類なきまでの長足なる発展」を遂げた。しかしそれは、①日露戦争の成果確保のために、軍拡とそれを支える経済建設が巨額な外債に頼って行われたこと, ②第一次大戦という「天佑」があったこと, など多くの矛盾を抱え込んだままのものであり, 20年3月の株価暴落をひきおこすが, 政府は「彌縫的に一時を糊塗し」たままであり, 小さな変動・恐慌が絶えず起り, 不況は慢性化していった⁴³⁾。

しかしそれと同時に「新中間層」の出現とそれを母体とした「文化産業」の成立, という二つの社会現象が進行していた時期でもあった。非物質生産に雇用され, 一定の学歴と知識を有し, しかも多くの場合, その所得は労働者の上に位置する, という性質を持った新しい社会階層, 「新中間層」が出現する。南〔1965〕は新中間層が明治末年から増大し続け, 1920年ごろには全国民の7-8%に達したと推測している⁴⁴⁾。南は同書でさらに, 文化産業の確立条件として①大衆の教育とコミュニケーションへの欲求, ②大衆の購買力の向上, ③西洋で開発されたテクノロジーの移入, の三点をあげている。日清・日露の戦争景気は大衆の購買力を向上させ, 「一大天佑」第一次大戦による景気拡大が大衆の生活を引き上げた。新聞, 映画などのメディアが産業として成立し, 鉄道を

中心としたレジャー産業が中間層を「家族ぐるみ」で取り込んでいく様子を分析している⁴⁵⁾。

丸善は、まさにこうした文化産業の一環であり、その顧客対象は明治期の一握りのエリートから、新中間層へと移行していった。それは①洋書需要の急増、②およびその顧客底辺の拡大、となって丸善の経営方針に影響を与えた。『百年史』は1910年ごろから洋書の輸入が急拡大し、毎月一回発行の『學鑑』の洋書案内では間に合わなくなったことから、1917年6月、「アナウンスメント」を独立、顧客に配布するようになったことをあげている。「アナウンスメント」は1930年9月から毎月三回発行、1937年3月から二回発行となっている（『百年史』p. 918）。すなわち雑誌論文による文化的啓蒙という間接的手段よりも、より直接的な新刊紹介広告のほうが効果的であると判断されたといっよい。

二つは、競合他誌、なかでも同様の企業広報誌として1902年から1907年の間に相次いで刊行された百貨店広報誌の存在である。

丸善にとって、洋書のみではなく、洋品、日用雑貨、レジャー製品などの輸入とその販路拡張は重要な課題となってき（『百年史』p. 925）ており、同様の商品（主として奢侈品）を扱う百貨店との間には激しい競合関係が生じていた。高島屋『新衣装』（1902年創刊）を先頭に、三越『時好』（1903年）、白木屋『家庭のしるべ』（1904年）、そごう『衣裳界』（1905年）松屋『今様』（1906年）、松坂屋『衣道楽』（1906年）、大丸『衣装』（1907年）など百貨店各社の広報誌は、雑誌、というより今日のカatalog誌に近いものが大半であった⁴⁶⁾。『學鑑』も対抗上、商品の紹介広告を中心におかざるを得なくなっていたと推測される。

しかしそのことは、百貨店等と丸善との差別化が難しくなり、洋書もまた奢侈品のひとつとしての価値しか持たなくなることを意味していた。丸善は盛んに洋書の新聞広告を試みるが、いまひとつ効果が上がらなかったようである⁴⁷⁾⁴⁸⁾。逆に古くから「殿方の丸善」を愛好していた読者層の離反を招いたのではないかと推測される。

5 「共栄圏」の定着と「開かれた社会」への憧憬～第3期から第4期へ

魯庵の死後1年たった1930年6月号から劇作家・水木京太⁴⁹⁾が編集人となる。彼は東司郎のペンネームで毎号「マアヂナリア」として海外書籍に関する情報や奇談を紹介、翌31～2年には署名原稿が増えたかに見えるが、33年からはまたペンネームによるものが多くなり、ページ数も1～2枚というかたちばかりのものに戻っていった。

果然、水木が打って出たのが、1936年4月に刊行された創刊40周年記念号である。

内田魯庵の息、内田巖の絵を表紙（それまでは裏表紙広告書籍中の写真を使用）とし、それぞれ1頁づつの挨拶、目次に続き本文70頁におよぶ新生『學鑑』は、それ以前の広告が9割、署名論文一、二本といったものと比べ、まさに生まれ変わった感がある。その内容は下記の通りであり、馬場、鳥居などかつての『學鑑』の常連執筆者が顔をそろえ、かつ柳田泉、宮田脩（魯庵のはここに当たる）、内田巖など、いわば魯庵ファミリーが寄稿することで、初心に返る意志を表明し、さらに新しくブックレビュー（翌37年からは書評と翻訳される）欄を設けるなど、総合読書雑誌『學鑑』の名にふさわしい内容をとりもどしている⁵⁰⁾。

○購書難	小泉信三	2頁
○回顧50年	馬場孤蝶	7
○東部西比利亜の本屋漁り	鳥居竜蔵	12
○明治24年以後	戸川秋骨	20
○丸善の思ひ出	石田幹之助	25
○書物の選択	南 弘	30
○學鐙の記念号に寄す	市島春城	36
○「學鐙」今むかし	柳田 泉	39
○内田魯庵君の追憶	宮田 脩	45
○丸善会社員 父	内田 巖	49

その後の『學鐙』は、魯庵が編集人であった時代と同様に、著名読書人や有望新人の署名原稿を中心に、新刊・名著の書評を配する形を踏襲していつている。この時代の特色としては以下の2点が上げられよう。

第一は、後半になるに従いアジア関連の論文・文献紹介が増加していくことである。図-1からも明らかなように、アジア関連の占めるウェイトは、37年の1.8%をボトムに増え続け、42年には1908年（日露戦争後の大陸進出気運が高まった時期）のピークに迫る割合となってきている。

具体的な内容を見ると、①論文は38年7月号で支那学の特集を組んだのを筆頭に、支那及び仏印の文献記事（40年10月号）、支那叢報（Chinese Repository）についての特集（41年9月号）、支那・タイ・仏印などの新聞雑誌特集（42年4、5月号）が組まれていること、②文献紹介は36年9月北部アジア、37年7月ソ連邦、8月現代支那、9月日露戦争、38年7、8月支那関係のそれぞれ特集が組まれており、40年以降は南方に広がってきている。即ち、南方共栄圏関係書目（40年10～43年12月号まで38回）、南方関係書解題（三吉朋十、42年4月号～43年12月号まで21回）がシリーズで掲載されていること、③広告部分にも、支那、南方地域の書籍が多くなり、新聞・雑誌取り扱い記事が毎号二頁に渡り掲載されるようになったこと、があげられよう。

第二は、洋書入手難、および時代の閉塞感をあらかず論文が掲載される一方で、戦局が深まるにつれ、「敵産図書」などの文字がつかわれるという戦争観の二分対立⁵¹⁾が散見されることである。そこには日露戦争後の熱狂状況を冷静に批判し続けた編集人・魯庵の視点はない。

1943年12月号を以て『學鐙』は「時局の要請に応え」（「休刊について」より）、一時休刊することになる。定価は一部20銭となっていた。高橋〔1943〕はその最終号の中で、「前大戦後には、敗戦国の貴重な図書がかなり多く我が日本に流れ込んできた。今回の大戦後には没落米英の貴重な典籍が更らに夥しく我が国にされることになるであらう。その時こそ丸善書店活躍の秋であり、従って又、『學鐙』が華々しく復活するの日であらう。」とし、「明日又春に逢はん」とする楽しい希望を抱くものである。」と結んでいる⁵²⁾。

6 新しい時代とは～第5期（紙幅の制約により割愛）

7 結語に代えて一本稿のまとめ

考察1：企業広報誌としての『學鐙』は1897年から54年までの間に3回性格が変わっている。第一回（1902年）の原因は編集者の交代に求められよう。第二回（1924年）は、関東大震災による休刊とその後の社会情勢の影響、および編集者の交代によるものである。第三回（1936年）は実態としては路線変更の再修正であった。これが為された原因は現時点では明確にできなかったが、広報誌がその性格を変えるとターゲットが離れていってしまうという事例を検出することが出来るのではないだろうか。第四回（1951年）は、第二次世界大戦後の新生の息吹とCIEのあと押しが背景にあったとことが考えられる。

考察2：論文内容には、時代要請によって、対象地域の変更がみられた。対外膨張期にはロシア、東アジア、東南アジア地域に関連した論文、文献解題が重視され、アメリカから民主主義・技術革新が導入された時期には、その関連論文が増加してきている。

その一方で常に人文科学関係を重視し、ヨーロッパ社会への憧憬を大切にしていた点も見逃してはなるまい。『學鐙』はその原点にヨーロッパ的リベラルアーツの流れを持ち続けていたといえよう。高度成長期を経て、この構図がどのように変化していくのか、アメリカの「文化帝国主義」がいつ頃から日本の読書文化をも席卷していくのか、は今後の研究課題である。

考察3：執筆者は碩学・大家を重用する時代と、新人を積極的に採用し、登竜門とする時代が交錯している。概していえば魯庵時代の後期、および戦後は新人を登用した時代であろう。そこには編集者の意志、というものが大きくものをいったのではないだろうか。その点では魯庵、水木、本庄という優れた人材が、単独で編集作業を行っていた⁵³⁾ということは、この雑誌の性格を規定する上で重要な要素であった。

考察4：その他にも小さな変化はいくつか概観された。しかしその根本を流れるものは第一に発刊の辞にある「學の道を照らす」という志であり、第二に編集人・魯庵の読書文化に対する思想であったといってよい。すなわち『學鐙』の存在意義は、一つは洋の東西を問わず新刊・名著を紹介すること（以て丸善の売りに貢献すること）であり、もう一つは書に対するさまざまな記事・論文を掲載することで、日本社会に読書文化を定着、普及させることにあった。『學鐙』はまさに企業理念と活動（商品）紹介の双方のバランスをとることで、100年余の長きにわたって生き残ってきた企業広報誌なのである。

〈注〉

- 1) 本稿では広報活動とは「その企業の存在、活動の目的と理念、内容を企業の内外に対し公開・発信し、他方、その企業に対する内外からの要望・批判をもれなく受け取って、企業経営陣がそれを認識する活動であり、情報の受発信を通じて、その企業の存在と活動が社会に支持と理解を得られるようにつとめる活動」（拙稿〔2004〕）と定義する。
- 2) ただし、評判がよいため、相対的に低価格で一般読者に頒布される場合もある。例えば現在、岩波書店『図書』（月刊）は1冊100円で、丸善『學鐙』（月刊）は1冊143円で、サントリー『サントリー・クォーター』（季刊）は1冊500円で、それぞれ希望者に販売されている。

- 3) 正式には『大日本水産會報告』。第一号の内容は、本会記事、論説、小集会演説、質疑応答、雑報、会員姓名などである。なお、通信欄に当時21歳の内村鑑三が「千歳川鮭魚減少の原因」の一文を寄せている。
- 4) 創業に至る状況は『學鐙』1969年1月号（創業100周年記念号）あとがき、および『社史』『百年史』『社史』をまとめると以下の通りである。

早矢仕有的（1836-1901）は岐阜県武儀郡岩村の人で、亡父の遺業を継いで医師となるが、59年に江戸にでて日本橋橋町で開業する傍ら英学に転じ、1867年、慶應義塾に入り福沢諭吉と師弟の契りを結ぶ。日本人の幸福を計るため貿易振興を唱えた福沢に促され、1868年（明治二年）に定款の基礎になる「丸屋商社之記」を議定。当時横浜に住んでいた有的は外国人商店から洋書を仕入れ（外国との直接取引は72,3年ごろ開始）、まず洋書店を開業、ついで薬店や唐物店なども営み、翌69年には日本橋通三丁目に東京店をおいた。丸善の名は、設立当時の名義人（架空）・丸屋善八を省略したものという。

- 5) 当時輸入取り扱いをしていた書籍として、『百年史』は芝新銭座にあった慶應義塾の教科書（Wayland, F., *The Elements of Political Economy*, Parley, P., *Universal History*, ウェブスターの *An American Dictionary of the English Language* など）、1878年に設立された三菱商業学校の教科書などをあげ、同社から納入したとしている（pp. 122-162）。

英語教科書が広く導入された様子を木村は「慶應義塾を中心として、都下に簇生した大小の英学塾」、および「明治政府も・教育令を公布し、そして最初の全国的学校として作ったのは中学に先んじて英語学校」があり、その教科書としては「慶應義塾の先例になろうて」用い、「それはたいてい丸善を通して輸入した」としている（『外史』p. 101。ただし、教育令公布は1879年であり、後述するように官立英語学校はそれ以前に設立されている。1886年教育令が廃され、帝国大学令、師範学校令、中学校令などが公布される）。

当時都下に開かれていた英学塾としては以下のものがある（日本英語教育史学会 HP より。（ ）内は創立者名）。1868年：慶應義塾（福沢諭吉）、三叉学舎（箕作秋坪）、1869年：攻玉塾（近藤真琴）、1870年：ヘボン施療所内の英学塾（メアリー・キダー）、共立学舎（尺振八）、育英舎（西周）、1873年同人舎（中村敬宇）。

1873年に開成学校の専門学科の教授用語が英語に制定され83年まで続けられたこと、74年に東京外国語学校の英語科を分離して東京英語学校が設置されたこと（同時に愛知、大阪、広島、長崎、新潟、宮城の外国語学校を英語学校とする）、80年代以降は「国民英学会」（88年、創立者：イーストレーキ、磯辺弥一郎）、「正則英語学校」（96年、創立者：齋藤秀三郎）などの私立英語学校が次々に創設されたこと、などを背景にて、英語教科書の輸入、翻刻需要は高まっていった。

- 6) 丸善が単独で出した最初の出版記録としては、1876年の内田嘉一（編述）『開化先導民家要文』、土屋寛信（抄訳）『新薬性効』の二冊がある（『百年史』p. 163）。主として自然科学に関する書籍が中心であり、異色のものとしては、1882年に発行された外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎『新体詩抄』がある（同上 pp. 163-190）。

欧文書籍出版としては、1885年の『英和雙解字典』が最も古く、教科書では *Cox-Glimpses of English Literature for Japanese Students* があげられている（刊行年の記載はないが、その後に出された村松守義のテキストが1885年刊行となっている）（同上 pp. 219-223）。

翻刻書、すなわち原著者とは無関係に出されたものは、英語文法書、および読本におおい。最も古いのは、ウィルソン第一読本（1880年、翻刻人は丸屋善七ほか5人）である。

- 7) 文部省が73年から83年にかけて翻訳刊行した全92編を改めて12冊に翻訳しなおし、83年に予約者が一千人に達したときに出版する、という形で予約出版した。『百年史』は「日本の知識階級に寄与するところが大きかった」とし、田口卯吉『日本社会事彙』、坪内逍遙『小説真髓』等に引用されている、としている（pp. 201-203）。
- 8) 読売新聞（1874年創刊）紙上に丸善の名が最初に検出されるのは1877年1月6日付記事で、「いったんお休みになった勸工新聞は体裁を改めて雑誌様にいたし第一号が出版になり日本橋通三丁目の丸善で売り捌く」とある。その後1890年までの13年間に46件の書籍出版紹介記事が掲載されている。しかし90年以降、

出版紹介はまったくなくなっている。このことも『学鑑』刊行の遠因のひとつと考えられよう。

- 9) 販売目録は年1回、もしくは数年に1回程度のものであったようである。(前掲書 p. 363)。現存する最も古い洋書販売目録は1883年10月に刊行されたもので、縦15.7センチ、横11.2センチ、53ページのもので、1216冊の書籍をアルファベット順に89項目に分類、それぞれを紹介している。

項目別の冊数を見ると、German Books (113冊)、French Books (41冊) となっており、それ以外の1062冊 (87%) が英語文献と推測される。分野別に見ると、①Political and Social Science (94冊) が群を抜いており、以下 Philosophy (79冊)、Natural History (67冊)、Medical Books (59冊)、Law Books (55冊) Mathematics (54冊) と哲学を別にして、自然・社会科学系統が並んでおり、当時の日本における洋書の読書状況をうかがい知ることができる。また哲学分野でもっとも優位を占めているのがスペンサー (79冊中13冊) であることも、後の欧米大著述に関するアンケート結果との関連で指摘しておきたい。
- 10) 創刊推定は1883年、10数ページのもの。
- 11) 注5に述べたように、日清戦争以前の洋書の読者層は、①英語塾、英語学校在学・卒業生、②大学、師範学校、中学校の在学・卒業生を中心とした中・高等教育を受けたものであった。『学鑑』創刊当時の中学校・高等女学校・師範学校・高等師範学校・大学の状況を見ると、1887年時点では110校、学生・生徒総数1万7160人であったものが、10年後の1897年には231校、7万488人、1907年には501校、18万4000人に急増している。
- 12) 東 [1936] p. 62。
- 13) 当時早稲田大学図書館長であった市島は、小野梓が神田で開いた東洋書館 (正確には東洋館書館 (現富山房)、1883年創業) が経営困難で失敗、中西屋も丸善に併合されたとしている (市島 [1936] p. 37)。

『百年史』は、丸善の東京出店と前後して清水卯三郎が同様の書店「瑞穂屋」を日本橋本町三丁目に開業、出版事業等でも丸善と競合・提携したが、事業は長続きしなかったと述べている (『百年史』 pp. 57-59)。

市島のあげた中西屋は、丸善洋書部の在庫を別個に販売する目的で有りが個人的に神田に開いたもので、中は日本、西は西洋を示したもので、古本売買などもてがけ、丸善とは別の顧客層をつかんでいたが、大正9年に丸善に併合され神田支店となった (『社史』 pp. 81-83および『百年史』 pp. 94-96)。
- 14) 「燈」か「鑑」かについては議論があったようである。1903年1月号雑報欄で魯庵は「學燈の燈字は本と鑑なり。説文に鏡なり、鏡中燭を置く故に之を鑑と云ふと。俗、別に燈と作れるは誤れるなり、是に非ず」と述べている。『百年史』資料編は、「トモシビの火扇を金扁のアブミに置き換えたのは、鑑が登降を意味するからで、本誌が登竜門を意味する自負による」としている。
- 15) 『外史』 p. 227による。戸川秋骨は「丸善回顧」(明治42年1月号『文章世界』)で「東京の丸善書店は、三越の呉服店と同じ関係を世間に対して持ち始めた。これは衣装をもって婦人にたいするよう、彼れは書物を以て学生にたいした。丸善はすなわち流行文学の中心となったようだった。時は明治三十五、六年のことであった。大陸文学はそのころから時流を風靡しはじめたのである。…丸善書店は面目を一新し、現代の新思潮は、ここの二階から寸時もやまずに世間に流出している」と述べている。
- 16) 高橋 [1930] pp. 182-183。
- 17) 前掲書 p. 216。
- 18) 第一、および第二の変化については『百年史』 p. 363。
- 19) 小宮 [1955] p. 301および p. 137。具体的には賠償金合計3億6000万円のうち1000万円が教育資金に割り当てられ、京都帝国大学新設 (1897年) のほか、1900年には小学校令が改正され、義務教育年限の確定および授業料免除などが制定された。
- 20) 前田 [2001] は明治初年識字率男子40%、女子15%でしかなかった日本に文字コミュニケーションが導入されたきっかけとして、①小学校教育、②新聞、なかんずく小新聞の存在をあげている (pp. 145-150)。土屋 [2002] は、1876年の東京府管内のリテラシー調査から、男性の8割以上、女性の6割以上が準識字、または識字層に該当するとし、識字人口の1割が大新聞、2割が小新聞を読んでいたと推測している (pp. 52-57)。

1895年当時の新聞発行部数をみると（警視庁統計表）、第一位は政友会系の中央新聞（1890年創刊，8万部），第二位「赤新聞」系の萬朝報（1892年設立，6.6万部），第三位小新聞の東京朝日新聞（1888年東京本社設立，5.4万部）となっている。

21) 『大宅壯一文庫創刊号コレクション』によれば，明治期149冊の雑誌が創刊されており，時代が下がるに従い増加していつている。内容的には①言論雑誌，②実業雑誌，③女性雑誌，④学生・少年向け雑誌，⑤文芸雑誌，に分けられる。鈴木〔2001〕は，言論雑誌は民友社の機関誌『国民之友』，三宅雪嶺主宰の『日本人』（1888年創刊）がリードしていたと指摘している（p. 8）。

22) 『百年史』p. 345。たとえば，『国民之友』は蘇峰が愛読した The Nation から名づけたものである。『太陽』は創刊号「太陽の発刊」（大橋新太郎）で，「十分に社会の真相を描して，周密，深妙，精美，円満，普遍なるを欲せば…雑誌に求むるにほかなし」とし欧米の『コンテンポラリー・レビュー』『イディンバラレビュー』『ハーパース・マンズリー』『ノースアメリカンレビュー』『スペクテートル』『フィガロー』『エコウ』『コスモポリタン』『レビューオブレビュー』などを例にあげている（鈴木前掲書 pp. 9-10）。

23) 前掲書 p. 17。

24) 『百年史』p. 987。

25) 『社史』p. 132。当時丸善は①書店（洋書の販売，および出版），②唐物店（洋品の地方小売店向け卸売），③菱屋（1884年に開店した洋物小間物の小売部），④工作部（1891年唐物部の下部組織としてインキを中心に西洋雑貨の製造販売），⑤輸入部，の5部からなっており，唐物店，工作部などの商品も軍事受容の増大に伴い増加，総売上額は1896年38万4100円，97年には，41万円に達した。中村重久（四代社長）の日記には，連日祝宴を開いている様子が記されている（『百年史』pp. 357-359）。

26) 全文は以下の通りである。

「題して學の燈といふ，アーク燈か，螢火か，吾人之を知らず，照すものは照すの理あって，之を點するのみ，其果して效の需むへきや否やは，社会各人に於て存す，吾人敢て之を人に強ひす。若し夫れ四面暗黒，乾坤晦暝の夜，行人途に迷ふものあらは，一道の櫓火，尚ほ以て能く前庭を導くに足らんも，月光天に耀き，火燭前後を照すあらは，三千燭光の電燈，亦何の要なけんのみ。いまの學界果して晦暝暗黒なるか，將又白日晴天なるか，吾人亦之を知らず，然れとも，三光天に耀くも，必らず陰翳あり，燈火滿街を輝らすも，臺下或は暗を破らす，一燈を加ふるもの自ら一燈の用を為す，吾人の此舉，豈必ら斯道に少補なからんや」

池田はこの発刊の辞を内田が書いたとしているが（池田〔1981〕p. 13），署名がないこと，内田が丸善に入社するのは1901年であり，当初は仕入れ等の相談役に当たっていたこと，などから考えて，そう断定するのは無理があるように思われる。

27) 東，前掲論文 p. 63。

28) 『百年史』は創刊当時のことを「社内で文章の下手の横好きが寄り合って原稿を書く同人雑誌のようなもので，名家の寄稿などは少なく，巻末を占める洋書の広告が主として読む人に役立ったもの」としている。（pp. 388-389）

29) 雑報欄によれば，「表紙は画伯長原止水氏の意匠になるものにして有名なるビューヴィス，ド，シャヴァンヌの「ラ，ヴィジランス」の面影をつたえしもの…欧文表紙のローマ字は現時ドイツに続々喧伝せらるるエックマンの筆意を模せしもの…」という。

30) 井上通泰，三島通良，志賀重昂，高橋是清，徳富猪一郎，内村鑑三，上田敏などが並んでおり，「抜けているものといえば軍人と女流名士」（『百年史』p. 461）であった。

質問事項は以下の六点である。①文芸学術諸科学を通じて19世紀中の最大著述，②最も興味ある詩賦小説等の傑作，③読書家の座右に疎な富べき19世紀の大著述，④各専門の学術文芸に関する19世紀の大著述，⑤19世紀晩年の大著述，⑥最も有名なる19世紀史および9世紀研究に最も必要なる参考書。

このアンケート結果は，翌年の『ジャパントイムズ』（1月7日付），『国民新聞』（1月7日付），『ロンドン・タイムズ・ウィークリー』（2月14日号），『太陽』（2月号，高山樗牛執筆）などのパブリシティに

相次いで取り上げられたという（『百年史』 pp. 466-468）。読書雑誌『學燈』の名を広めると共に、これらの書誌の売れ行きを高めたことは想像に難くない。『社史』は第一位を占めたダーウィン『種源論』が定価2円で高すぎたため50銭の特別版を作らせ、「書籍の山が天井まで届いたのを見たときは、果たしてこのように難しい専門書が…捌きつくせるのかと店員一同、危惧の間を抱いたが、見る見る小さくなり、なくなり、それから何回輸入してもたちまち消費」しつくしたというエピソードを紹介している（p. 463）。

- 31) 内田魯庵：評論家、小説家、翻訳家。1868年—1929年。本名内田貢。明治21年評論「山田美妙大人の小説」を『女學雑誌』に発表、以後同誌に小説批評、書評などを掲載し、新人批評家として注目される。ロシア文学に早くから影響を受け早くから影響を受け、25年ドフトエフスキーの『罪と罰』の翻訳を刊行。文学は常に社会・人生の問題と真剣に取り組むべきことを主張。34年丸善に入社、書籍部顧問として『學燈』を編集（『新訂 作家・小説家人名事典』より）。

魯庵は当時の読書状況は「安価な私小説や心境小説や、低劣な探偵小説や冒険小説」など青年男女向けのものばかりであり、大半は「学校を離れたら最後、夫れぎり書籍とは縁切りになって」しまい、「読書を仕事の一つとすべき筈の学者階級が存外智識的欲求に」欠けていて、「新著となると頭から藐視し手に執ろうともしない」と慨嘆していた（内田〔1996〕 pp. 244-247）。魯庵にとって、書籍に関する雑誌の刊行を手がけることは使命感を持った行動であったといえよう。

- 32) 『百年史』は以下のように述べている。「彼（魯庵）の入社以後の丸善のイメージは作られたといってもいいし、あるいは端的に「丸善即魯庵」と即断しても、多くの異論は出まいと思われる」。魯庵はどのような経緯で丸善に入社したのか。「横浜に行つてトルストイの「アンナ・カレニナ」の英訳を求め、帰りに丸善によって「この店ではこういう本をいつも置いているようでないとダメだ」と言ったら、誰かがその言に心を留め、それが縁となって丸善に迎えられるにいたつた」としている（p. 442および pp. 446-447）。魯庵33才であった。

- 33) 魯庵自身、広告・宣伝に並々ならぬ関心を抱いており、「アメリカのお嬢さんは学校でも家庭でも皆オノト！」で始まる「オノト・ガール」で有名なオノト万年筆の広告文をはじめ、『學燈』に掲載する多くの広告文を手がけていた。1902年および06年にはブリタニカの予約販売を全国主要新聞に広告を大量かつ集中的に掲載し、02年には1125名、06年には4500名の申込者を集めた。とくに07年2月の廉価販売最後の追い込み広告では、連日砂時計の図を入れた全ページ広告を続け、最終日は「砂はまったく落ちきらんとす」というコピーで締めくくつた（『外史』 pp. 223-227および山本・津金澤〔1992〕 pp. 275-276）。

魯庵は、『墓の舌』「(七) ポスター宣伝」、『バクダン』「(二十四) 広告」、「広告の現在と近い未来」『広告文化』（正路喜社、1925、全集に未収のため未見）、などの広告・宣伝論を著している。山口は、魯庵は空間の中に於ける表現の可能性を見ており、政治プロパガンタとしての広告、広告の先行形態に至るまで考察がおよんでいた、としている（山口〔2001〕 p. 497）。

- 34) 東は当時花形の雑誌『新小説』、『文藝倶楽部』が15銭か20銭だったとしている。筆者の調査によれば、創刊当時の価格は『文藝倶楽部』『太陽』が15銭、『新小説』が12銭であり、この臨時増刊号は一般向け文芸雑誌としては相対的に高いものであったようである。なお、東は臨時増刊の定価を30銭としているが、誤りである（東〔19〕 p. 30）。

- 35) Guide to the Best Works of the Continental Literature (translated into English) とされ、表紙には眼鏡をかけた小太りのキューピッド（魯庵を模したもの？）が丸善特製インクつぼを傍らに鴛鴦ペンをとっているユーモラスな挿絵が書かれている。

- 36) 魯庵生〔1904〕 pp. 1-8。内田〔1996〕付録の齊藤昌三編「内田魯庵著作年譜」には採録されていないが、明らかに魯庵の手になるものである。ちなみに魯庵は同年12月号の『太陽』に「戦死者の妻」という論説を発表（『全集』未収録）、戦争に否定的態度を表明している。

- 37) 山口は、魯庵と満鉄奉天図書館長・衛藤利夫のつながりを指摘、奉天図書館が「国家総動員体制の図書館版」であったとしても、「ある意味で魯庵の夢をかたちにするために満州にわたつたといえないことは」なく、そのアジア研究総合図書館の夢は、「天理図書館、アジア経済研究所、東洋文庫、東京外大アジア・

- アフリカ研究所，国立民俗学博物館などに」実現されつつある，としている（山口前掲書 pp. 561-574）。
- 38) 魯庵生〔1905〕pp. 1-10。
- 39) 魯庵はトルストイの影響を受け，ドウホポール教徒（コーカサス地方の無抵抗主義キリスト教徒）について以下の三本の論説を書いている。「兵器を焚きて非戦を宣言したる露国の宗教」『太陽』（明治37年5月号），「兵役拒絶の宗教」『読売新聞』（大正11年2月4日-15日，のちに『バクダン』に収録），「トルストイ及『復活』著述始末」『學鏡』（明治41年10月号）。
- 40) 30～39巻の全署名論文168本を分析した結果，①35人の執筆者が書いていること，②最高回数執筆者は東司郎（50回）であり，以下DON 八（25回），ドクトル・トンソン（15回），XYZ（8回）の順であること，③上位7人の総執筆回数は全体の7割以上となっていること，④明らかにペンネームと指摘できるのは，上記4名の他，YNK 生，アン・ブチ・パリジャン，丸屋善吉など9名，合計13名であること，などの事実が検出された。
- 41) 柳田はこうした状況を「ただいまの『學鏡』はまず純然たる丸善株式会社の宣伝雑誌，乃至広告雑誌となったかのごとき感じがある」とし，「同じ商売意識を見せるにしても，いま少し大きく，上手に…出来たらと思ふ」と述べている（柳田〔1936〕p. 39）。
- 42) 『百年史』p. 920。本庄は復刊後の状況を「内容は海外の文化消息を連ねるだけになり，魯庵も家に籠もって自分の仕事に専念した」と述べている（本庄〔1985〕p. 243）。
- 43) 高橋〔1930〕pp. 429-434および南〔1965〕pp. 172-174。
- 44) 南〔1965〕p. 183。
- 45) 前掲書，pp. 118-120，およびpp. 143-149。
- 46) 土屋前掲書は三越『時好』が，「文学趣味をまったく洗ひ落として広告専門の雑誌」とするのを狙いとしていたのに対し，白木屋『家庭のしるべ』は婦人向け総合雑誌として創刊された，としている（p. 231およびp. 237）。
- 47) 1923年の関東大震災をはさんで前後20年間の読売新聞に掲載された丸善の広告を書籍，文具，ファッション関連，その他に分類すると，以下の三点が読み取れる。①広告総数は27年以降右肩上がりに上昇していること，およびその構成比を見ると，②書籍関連の構成比は，20年の62%をピークに減少してきたが，28年以降増加に転じていること，③ファッション関連は，震災当年の23年を別にして，21，22，24年ももっとも高く（22年=66%），それ以降はほぼ3割程度で推移していること，である。
- 48) 1931年2月6日付読売新聞は丸善，三省堂，三越の三店が洋書界で三つ巴となっている，と報じている。新進三省堂は30年春から洋書販売を開始，一方の三越は31年3月中旬には開始する予定で通信販売にも着手しようとしている，とし，「これによって利益するものは年とともに増え行く洋書の読書子である」としている。
- 49) 水木京太：劇作家，演劇評論家。1894年～1948年。大正8年慶應義塾大学文科卒業。在学中小山内薫に傾倒。大正9年『三田文学』の編集に携わり，慶應義塾大学講師として劇文学を担当。昭和5年丸善に入社し，雑誌『學鏡』を主宰。「東京朝日新聞」の劇評も書いた。戦後は月刊誌『劇場』の主幹を務めた。この間多くの戯曲を発表し，作品に「殉死」「フォード躍進」，著書に『新劇通』，『戯曲集 福沢論吉』など。イブセン研究でも有名。（『新訂 作家・小説家人名辞典』より）
- 50) 記念号に編集者からのあとがきはないが，それ以降の朱筆録は，「好評に継ぐ好評」を素直に喜んでいる。
- 51) 前者の具体例としては以下の論文が挙げられる。芦田均「壘太利の最後の日」（38年12月号），稲原勝治「出版の貧困」（39年12月号），吹田順助「洋書飢餓対策」（40年9月号），竹友藻風「文学書の輸入」（41年6月号），重徳泗水「洋書難と私」（41年12月号），井汲清治「開かれた社会」閉鎖さる」（42年2月号），田中耕太郎「洋書のはほひ」（43年12月号）。後者としては以下の論文を指摘したい。大田咲太郎「敵産図書」（43年6月号），日高基裕「敵産の釣書」（43年8月号），木下半治「フランスに於けるファシズム文献」（43年11月号）。
- 52) 高橋〔1943〕p. 41。

53) 本庄前掲書, p. 240。

〈参考文献〉

1: 原資料

丸善『學鑑』1巻1号—第51巻12号(1987年1月—1949年12月)
小泉信三「購書難」『學鑑』40巻4号(1936)
春山行夫「『學鑑』の50年」『學鑑』50巻3月号(1953)
東 司郎「『學鑑』40年」『學鑑』40巻4号(1936)
市島春城「學鑑の記念号に寄す」『學鑑』40巻4号(1936)
喫茶三味楼主人「軍国之読書」『學鑑』8巻3号(1904)
魯 庵生「戦勝の記念としての図書館」『學鑑』8巻10号(1904)
魯 庵生「夢に老翁と語る」『學鑑』9巻3号(1905)
高橋誠一郎「丸善」『學鑑』47巻12号(1943)
丸善『學鑑総目次』丸善,
内田魯庵『内田魯庵全集』ゆまに書房, 1987
内田魯庵『猿の舌』杜翁全集刊行会, 1920
内田魯庵『魯庵隨筆—読書放浪』平凡社, 1996
内田魯庵『魯庵の明治』講談社, 1997
内田魯庵『気まぐれ日記』《リキエスタ》の会, 2001

2: その他研究書等

井上 健「明治期『太陽』の翻訳文学紹介をめぐって」鈴木貞美(編)前掲書
巖谷大四『物語明治文壇外史』新人物往来社, 1990
開国百年記念文化事業会『明治文化史』第3巻 村上俊亮・坂田吉雄(編)教育・道徳編, 洋々社, 1955
同上第4巻 高坂正顕(編)思想・言論編, 洋々社, 1955
同上第7巻 岡崎良恵(編)文藝編, 洋々社, 1953
同上第10巻 小宮豊隆(編)趣味・娯楽編, 洋々社, 1955
同上第11巻 渋沢敬三(編)社会・経済編, 洋々社, 1955
同上第12巻 渋沢敬三(編)生活編, 洋々社, 1955
同上第13巻 柳田国男(編)風俗編, 洋々社, 1954
川戸道昭, 中林良雄, 榊原貴教(編)『明治期翻訳文学全集《新聞雑誌編》別巻1 明治期翻訳文学総合年表』大空社, 2001
木村 毅『丸善外史』丸善株式会社, 1969
杉本邦子『明治の文芸雑誌—その軌跡を迎える—』明治書院, 1999
鈴木貞美「明治期『太陽』の沿革, および位置」鈴木貞美(編)『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版, 2001
鈴木正節『博文館『太陽』の研究』アジア経済研究所, 1979
関 忠果, 小林英三郎, 松浦総三, 大悟法進『雑誌『改造』の四十年』光和堂, 1977
高橋亀吉『最近の日本経済史』平凡社, 1930
中央公論社『中央公論社70年史』中央公論社, 1955
中央公論社『中央公論社の八十年』中央公論社, 1965
司 忠『学燈をかかげて』ダイヤモンド社, 1967
土屋礼子「百貨店発行の機関雑誌」山本武利・西沢保(編)『百貨店の文化史 日本の消費革命』世界思想社, 1999

同上『大衆紙の源流』世界思想社，2002
永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部，1997
日本銀行統計局『明治以降 本邦主要経済統計』日本銀行統計局，1966
野村 喬『内田魯庵伝』リプロボート，1994
本庄桂輔『『学燈』編集の思い出』白鳳社，1985
本間立志（監修），『日本経済統計集1868-1945』日外アソシエーツ，1999
前田 愛『近代読者の成立』岩波書店（岩波現代文庫），2001，
丸善株式会社（司忠）『丸善社史』丸善株式会社，1951
丸善株式会社『丸善百年史（上・下・資料編）』丸善株式会社，1980
三浦朱門『『中央公論』100年を読む』中央公論社，1986
同上『ドウホポール教徒の話 武器を放棄した戦士たち』垣文社，1979
山口昌男『内田魯庵山脈 〈失われた日本人〉発掘』晶文社，2001
山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局，1981
山本武利・津金澤聡廣『日本の広告一人・時代・表現』日本経済新聞社，1986
日本英語教育史学会 HP: <http://www.hiroshima-pu.ac.jp> (2004年8月20日)
大宅壮一文庫『創刊号コレクション』HP: <http://www.oya-bunko.or.jp/soukan> (2004年8月25日)